「ジャズピアニストの弾くバッハ」

出演　山口コーイチ（ピアノ）
曲目　J.S.BACH　平均律クラヴィーア曲集第一巻全曲（二時間程度）

前売り 3000 円　**当日** 3.500 円
お問合せ先　NEO 浄興寺プロジェクト 綿貫　☎025-530-8013　Mail：unisoncreate@gmail.com
プレイガイド　浄興寺、上越文化会館、ヘヴンズカフェ（アコーレ店）
会場　国指定重要文化財　浄興寺　上越市寺町 2-6-45　☎025-524-5970
主催　UHAUHAMUSIC
協力　NEO 浄興寺プロジェクト
注意事項
※駐車場は寺町駐車場をご利用ください。
※椅子席の予定です。

山口コーイチ
福岡県出身。三歳よりピアノを始める。国立音楽大学卒。クラシック奏法、和声、厳格対位法、音楽分析、パイプオルガンによる古楽演奏法、指揮法などを学ぶ。J.S. バッハの作品に傾倒しそれは今も続く。ジャズは独学。在学中よりジャズ、タンゴ、即興演奏、バッハを中心にした演奏活動をはじめる。渋さ知らズオーケストラ参加後は、国内はもとより、アジア、ヨーロッパ、アメリカと 20 カ国以上に上るツアーのなかで、各地の重要なフェスティバルや大劇場に出演。2000 年には立花秀輝の AAS で横浜ジャズプロムナードコンペティションにてグランプリ。

現在は「シワブキ（w/ 加藤一平 gt. 磯部潤 ds）」「雪原カルテット（w/ 小林里枝 as. 清水良憲 b. 磯部潤 ds.）」「山口コーイチタンゴトリオ（RIO/bs. 小林真理子 b)」「オンゾ アニマムジカ（w/ 青山健一 映像）」「ゲンゴカルテット（w/ 定村史朗 vl. 柴田奈穂 vl. 糸永衣里 vla. 不破大輔 b.）」「山口コーイチトリオ（w/ 不破大輔 b. つの犬 ds.）」を主宰。「渋さ知らズオーケストラ（不破大輔）」「川下直広 4(川下直広 ts、不破大輔 b、岡村太 ds)」「AAS（立花秀輝 as, カイドーユタカ b. 磯部潤 ds）」等に参加。
他にも NHK「ピタゴラスイッチ」などの録音、玉井夕海 CD「マザー」等の楽曲のアレンジ、などその仕事は多岐にわたる。
山口コーイチトリオ「Love for life」「circuit」の二作を studiowee より、シワブキ「Generators」を地底レコードよりリリース。

「平均律クラヴィーア曲集第一巻」

平均律クラヴィーア曲集（へいきんりつクラヴィーアきょくしゅう、原題独 : Das Wohltemperirte Clavier、現代のドイツ語表記では独 : Das Wohltemperierte Klavier) は、ヨハン・ゼバスティアン・バッハが作曲した鍵盤楽器のための作品集。1 巻と 2 巻があり、それぞれ 24 の全ての調による前奏曲とフーガで構成されている。第 1 巻 (BWV846～869) は 1722 年、第 2 巻 (BWV870～893) は 1742 年に完成した。

原題の "wohltemperiert(e)" とは、鍵盤楽器があらゆる調で演奏可能となるよう「良く調整された（well-tempered)」という意味であると考えられ、必ずしも平均律を意味するわけではないが、和訳は「平均律」が広く用いられている。

バッハは第 1 巻の自筆譜表紙に次のように記した。
「指導を求めて止まぬ音楽青年の利用と実用のため、又同様に既に今迄この研究を行ってきた人々に特別な娯楽として役立つために（徳永隆男訳)」

現代においてもピアノ演奏を学ぶものにとって最も重要な曲集の一つである。ハンス・フォン・ビューローは、この曲集とルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンのピアノソナタを、それぞれ、音楽の旧約聖書と新約聖書と呼び、賛賞した。

フレデリック・ショパンの「24 の前奏曲」や、ショスタコーヴィチの「24 の前奏曲とフーガ」は、このバッハの曲集に触発されたものである。

様々な様式のフーガが見られ、中でも 3 重フーガ（嬰ハ短調 BWV849）や拡大・縮小フーガ（嬰ニ短調 BWV853）は高度な対位法を駆使した傑作とされる。（wikipedia より）

初めてバッハに出会ったのは 14 歳頃でした。吹奏楽部のちょっと気になる先輩の家にみんなで集まってジュースなどを飲んでいたときに、彼女がアップライトピアノに向かってバッハのインベンション一番を弾いた。いまでも鮮明に憶えています。一瞬で激しく魅了されました。それ以来 49 歳の今でも魅了されつづけています。

メンデルスゾーンによるマタイ受難曲（3 時間に渡る大曲です）発掘と再演で世界にまた思い出されるまで、バッハはすっかり忘れ去られていて、散逸した楽譜の発掘発見は今も続いています。しかし鍵盤楽器のためのたくさんの曲集はピアノを志す人々に重要視され弾き続けられてきました。

バッハは「フーガ」という複数の旋律を組み合わせる作曲技法を完成させた作曲家です。

ソプラノ、アルト、テノールやベースなどの声部が、ベースだから低音を支える、とか、ソプラノだからソロのように、とか、そういうポジショントーク的のようなあり方ではなくて、一つ一つの声部が生き生きとした人間のように胸を張り、自由に歌いつつ、それが、お互いに響和しあい立ち上がっていくバッハの音楽。

私たちの生きるこの世界でもこのように自由に生きて行くことができるのだ、と思わされます。今思えば、僕はそれだけをピアノで現前させることを目指してきたような気がします。

山口コーイチ